

論文審査の要旨
Summary of Dissertation Review

博士の専攻分野の名称 Degree	博 士 (教育学)	氏名 Author	石井洋
学位授与の要件	学位規則第4条第1・②項該当		
論 文 題 目 Title of Dissertation	ザンビア授業研究における数学教師のアセスメント・リテラシーに関する研究		
論文審査担当者 Dissertation Committee Member	主 査 Committee Chair 広島大学大学院国際協力研究科 教授 馬場卓也 印 Seal 審査委員 Committee 広島大学大学院国際協力研究科 教授 清水欽也 審査委員 Committee 広島大学大学院国際協力研究科 准教授 牧 貴愛 審査委員 Committee 広島大学名誉教授 池田秀雄 審査委員 Committee 埼玉大学教育学部 教授 二宮裕之		
〔論文審査の要旨〕 Summary of Dissertation Review	<p>授業研究 (Lesson study) は、日本の教師が専門性を高めるために、「授業」を対象とした相互研鑽を行う場として、長年実施されてきた。Teaching Gap (Stigler & Hiebert, 1999) を機に世界的に注目を浴び、近年多数の国で導入されている (ICME2016, Mathematics Lesson Study around the World)。しかし実態は、決められた手順による形式的な実施にとどまり、専門性の向上や授業の改善などの変化は十分に起きていないことが指摘されている (Takahashi, 2011; Hart et al., 2011)。特に開発途上国において、その中核を担う教材研究に必要な基礎的知識や経験が欠如しており (中和, 2016)、本研究は、授業研究におけるこれらの困難点の克服に取り組んだ。</p> <p>本論文は以下の6章で構成されている。第一章では、問題の所在と本研究の目的および方法を述べた。基礎的知識や経験が欠如する中での授業研究の改善は容易ではなく、本研究は、「アセスメント・リテラシーに基づいた実践を既存の授業研究に導入する調査を行い、その効果を検証すること」を目的とした。第二章では、ザンビアの教師教育、授業研究の現状と課題を分析した。マニュアル化は授業研究を行うことを可能にしたが、教材研究が発展していないザンビア (馬場, 中井, 2007) において、その改善が困難であることを述べた。第三章では、アセスメント・リテラシーに関する先行研究から、評価には、外部に向けて評定を示す「価値判断としての評価」と教授活動の改善に道筋を示す「指導目的としての評価 (問題解決としての評価)」があること (鹿毛, 2000) に言及し、後者の視点から、先行研究 (Abell & Siegel, 2011; 藤井, 2012; 吉崎, 1987) を基にアセスメント・リテラシーの概念枠組みを構築した。第四章では、その概念枠組みに基づき、調査方法を設定した。第五章では、評価を重視していない従来型の授業研究グループ(A)に対して、評価を重視するグループとして数学教師グループ(B)と全科教師グループ(C)の二つを設定し、グループB、Cに対してレディネステストを実施し、これら三グループの授業研究サイクルを調査した。収集したデータを「連続体としての能力モデル」 (Blömeke, Gustafsson, Shavelson, 2013) を基に分析し、グループ間の差異を専門的知識とアセスメント・リテラシーの観点から考察し、終章では以上を総括した。</p> <p>従来型のAグループでは、教師の意識が生徒の実態や教科内容・教材について及ばず、一般的な教授法に偏っていたこと、評価を重視したBとCグループでは、教授法のみならず生徒や教科内容 (分数の内容) にまで意識が広がっていたことが確認された。さらに、診断的アセスメント・リテラシー</p>		

において、教科内容知識の多寡が、生徒の実態把握や教授法の考察、授業改善につながっていく様相が明らかにされ、形成的アセスメント・リテラシーにおいて、Cグループは生徒の誤答に気づくことができず、Bグループは生徒のつまずきを授業に生かそうとする様相が観察された。本研究の成果として以下の三点があげられる。(1)授業研究を改善する能力として教師の「アセスメント・リテラシー」を顕在化させ、その概念枠組みを構成した。(2) (1) に基づく調査で三グループの授業研究の様相を明らかにした、(3) (1)、(2)を通じて文脈性を意識した授業研究の実施及び改善の可能性を示したことである。

主要な質疑応答は、文脈性とその位置づけ、アセスメント・リテラシーの概念枠組みモデル、データ分析及び解釈についてである。それらの質問および指摘に対して、申請者は審査会でおおよそ回答したが、タイトル、概念枠組みモデル、文脈に関してさらに軽微な修正意見が出された。それらに対して、7月31日に修正校が再提出され、審査委員会は十分に修正がなされたことを確認した。以上より、本研究は授業研究の改善について新たな視点から取り組むことを提案し、調査によってその改善の可能性を具体的に示したという点で、学位請求論文としての独創性を有し、審査員全員が学位請求に相当する内容の論文であると認め、合格と判定した。なお、その骨子は公刊済みである。